



日頃の「コミュニケーション」を大切に、糖尿病患者さん、医療スタッフ、地域とかがかわる

山形県最大の都市で、中核市に指定されている山形市。四方を山々に囲まれ、樹氷や温泉で名高い「蔵王」、俳聖松尾芭蕉の名句で知られる「山寺」など、人々を魅了してやまない絶景スポットも多く、1年を通して美しい風景を堪能できることで知られています。この地域で糖尿病の専門医療の提供に努めている「東北中央病院」取材。糖尿病内科部長の岡村将史先生に、その取り組みについてくわしいお話を伺いました。

「コミュニケーション」をキーワードに、地域全体で糖尿病患者さんをサポート

東北中央病院は、山形県山形市において基幹病院と医院・クリニックの中間に位置し、急性期を過ぎたあとの長期戦に備える準備にあたるほか、かかりつけ医としての役割も担っています。

「心温かい信頼の医療」を基本理念に、糖尿病の専門医療にも力をいれている同院ですが、糖尿病内科部長の岡村先生によると「糖尿病専門医が不足しているなか、専門医以外の先生方ともしっかり連携をしながら、地域全体で糖尿病患者さんをサポートしていくスタンスが求められる」といいます。

また、患者さんの平均年齢が高く、高齢の糖尿病患者さんが多いそうですが、核家族化が進んで「家族力」が弱まっている傾向にあることも鑑みるなど、家族のサポートや収入面など社会的・経済的問題にも十分に配慮した診療を日々心がけているそうです。

このような問題に対処しながら糖尿病患者さんを支えていくために大切な

キーワードが「コミュニケーション」だといえます。患者さんに対してはもちろん、院内及び地域の医療関係者間でも重要で、コミュニケーションを日頃から意識することで、些細なことでも連絡や相談をしやすくなり、よりスムーズな対応に結びついています。

チームで連携して対応することで、より現実的な治療選択が可能に

多数を占める高齢の糖尿病患者さんについては、できるだけわかりやすい言葉を選んでいねいに説明し、糖尿病以外の心身の不調にも注意するなど、よりコミュニケーションに気を配っているそうです。その関係性からインスリンポンプの使用など、最新のデバイスや治療薬などの導入がスムーズにいくという事例もあるとのこと。

患者さんとのコミュニケーションには、コメディカルも大きな役割を果たしています。医師には話しにくいことでも看護師や管理栄養士、ソーシャルワーカーには安心して話せるようなことも多く、チームとして連携することでより良好な

コミュニケーションが可能となります。

糖尿病療養指導士資格を取得している医療スタッフも多く、専門的なことにも対応できるほか、高齢の糖尿病患者さんへの社会的・経済的問題のサポートについては、とくにソーシャルワーカーの働きが欠かせないとのこと。家族のサポートの有無、自宅か施設か、社会的・経済的状況などの問題点を聞き出し、解決点を探っていくスペシャリストとしてソーシャルワーカーがチームとしてかわることで、それぞれの問題に応じた現実的な治療の選択に役立っているそうです。

医療スタッフのチーム力、地域医療における連携力の強化に努める

院内でのチーム連携にあたっては、より多くの医療スタッフに糖尿病療養指導士資格の取得を推奨しているほか、定期的に勉強会を開催して、薬剤やデバイスについて最新の知識をアップデートするなど、チーム力のアップに努めているといいます。

また、糖尿病療養指導士の資格を



糖尿病内科 部長 岡村将史先生



病院外観



糖尿病内科 医療スタッフ



NST (栄養サポートチーム) 回診中

持った専属の診療助手が1名常勤し、よりスムーズな対応ができる体制を構築しているほか、眼科については院内に糖尿病眼科外来があり、初診の糖尿病患者さんは自動的に受診してもらうシステムとなっているそうです。

高齢者対応においては、週に1回、地域包括病棟で行われているミーティングに参加し、ソーシャルワーカー、地域のケアマネジャーと連携をとり、意思統一を図っています。

一方、地域医療連携については、定期的に勉強会(和合懇話会)を開催し、多くの先生方を巻き込んで、地域医療における連携力の強化に努めているそうです。開業医を主体とした委員会が設置されており、岡村先生も委員の1人。新型

コロナウイルス感染症の流行下においても、感染予防に配慮しながら、年に4~5回、連携を絶やさないように活動を続けているそうです。

フットワークの軽いコミュニケーションで患者会活動にも積極参加

同院では、患者さんとそのご家族に糖尿病について理解を深めてもらうために、眼科、歯科、循環器など他科の協力も得ながら定期的に勉強会を開催するなど、患者会(糖尿病友の会「山和会」)活動にも積極的にかかわっています。糖尿病療養指導士が日頃からフットワーク軽くコミュニケーションをとっており、コロナ下で一時活動休止中ではある

ものの、状況に応じてできるだけ早く再開したいと意欲を示されました。

コロナ下において、初期は受診控えも多かったそうですが、とくに高齢の糖尿病患者さんに日頃の血糖コントロールが何より大切であることを理解してもらうのに、これまでのコミュニケーションが功を奏し、概ね良好なコントロールを維持しているとのことでした。

体力をつけ心身をリフレッシュすることが、患者さんのためにも自身の健康のためにも大切と、休日は積極的にウォーキングをしているという岡村先生。そのバイタリティを活かし、これからも多くの糖尿病患者さんを守り、地域医療を活性化してくれることでしょう。